96歳(さい)の遺言(ゆいごん)

語り手
久米 錠

聞き書き
中多久多

96歳の遺言

～ 戦争だけはやっちゃダメ ～

◆目次◆

あたしの大事な孫やひ孫たちへ　3

「96歳の遺言　戦争だけはやっちゃダメ」　5

本文の注釈　36

戦中戦後の東京の食糧事情　43

あとがき　48

関連WEBページ紹介　51

□ 絵本のさし絵のためのスケッチ画

あたしの大事な孫やひ孫たちへ。

これは、おばあちゃんの「戦争だけは絶対やっちゃダメ」という遺言[1]です。
たった一枚の赤紙[2]で人生を狂わされて、戦争が終わってから、
もっとひどくなった生活との戦いを一人でさせられたおばあちゃんの、
「戦争だけはやっちゃダメ」という叫びです。

あたしは、大正6年[3]3月17日生まれ。
平成25年のいま、満96歳になりました。
目は見えないし、耳もひどく遠いけど、アパートで一人暮らしをしています。
長男は遠くに住んでおり、次男には先立たれた[4]けれど、
遠くないところに次男の嫁も孫もひ孫もいて、ときどき来てくれる。
昼食と夕食のときに、ヘルパーさん[5]が1時間くらいずつ来て、
ご飯を作ってくれる。それ以外のときは、昼も夜も一人の時間が長いけど、
最近、自分で死に支度[6]をすませたから、血圧も下がって元気が出た。

うちには、ちゃんと檀那寺[7]があってね。あたしが死んだら、和尚さんが来て、
この部屋で枕経[8]をあげてもらえるように頼んであるの。
そのお布施[9]も準備してある。
その檀那寺の末寺[10]にお墓も作ってある。遠いんだけどね。
市役所の人が来たとき、死んだあとはどうすりゃいいか聞いたら、12万円
用意しておけば、柩[11]も焼き場[12]の費用[13]もすべてまかなって[14]もらえるそうで、
安心しちゃった。
だから、もう何の心配もないの。

だけどね、
昭和[15]の戦争でひどい目にあったあのつらい時代を話せる相手がいなくなった。
友達は、みんな死んじゃったもの。
あの時代をいま、話しておかないと、
またバカな戦争をはじめちゃいそうで恐ろしい。
ひ孫やその子孫が兵隊にとられたら、大変だ。
戦争だけは、絶対やっちゃダメ！

目も耳も脚も不自由だが、口は達者[16]だ。
記憶が確かなうちに、聞いておいてもらいたかった。
たまたま病院で、82歳の人と友達になった。
東京の人で、焼夷弾[17]の火の雨を知っているから、話が通じるんだ。
あたしの話を書いといてくれるというから、
じっくり話して、記録していただくことにしたのよ。
では、おばあちゃんの一代記[18]を読んでちょうだいね。

七十代ごろの久米 銈さん

96歳の遺言

～戦争だけはやっちゃダメ～

語り手　久米 銈

聞き書き　中谷久子

◎本文中の

け　は久米 銈さんのことば

ひ　は中谷久子さんのことば

生まれは浅草、観音様[19]の後ろのほう。
浅草警察の近所。当時は「象潟」といった。

母校は富士小学校、いまもある。関東大震災で焼けた跡に建てられた校舎は、
鉄筋コンクリートのしゃれた洋風建築だった。
近くに、お富士さんのお灸[20]をすえるので有名な浅間神社がある。
富士小学校の運動会の応援歌は決まっていた。
（け「花咲かじいさん」の曲で歌うんだ。）

オーフジサンノ 神主が
おみくじ引いて申すには
フージはいつでも カーチ カーチ カッチカチ

父親は、建築のほうの鍛冶職[21]の親方[22]。
鉄の柵とか門扉[23]とか、上野動物園の檻などを作っていた。

北に500メートルほど行けば、吉原遊郭[24]の大門[25]だ。
中で引き手茶屋[26]をやっている親戚のおばさんがいた。
吉原の中に公園があって、午の日[27]が縁日[28]で、夜店[29]が出た。
遊郭だけど、子どもは自由に出入りができたんだ。

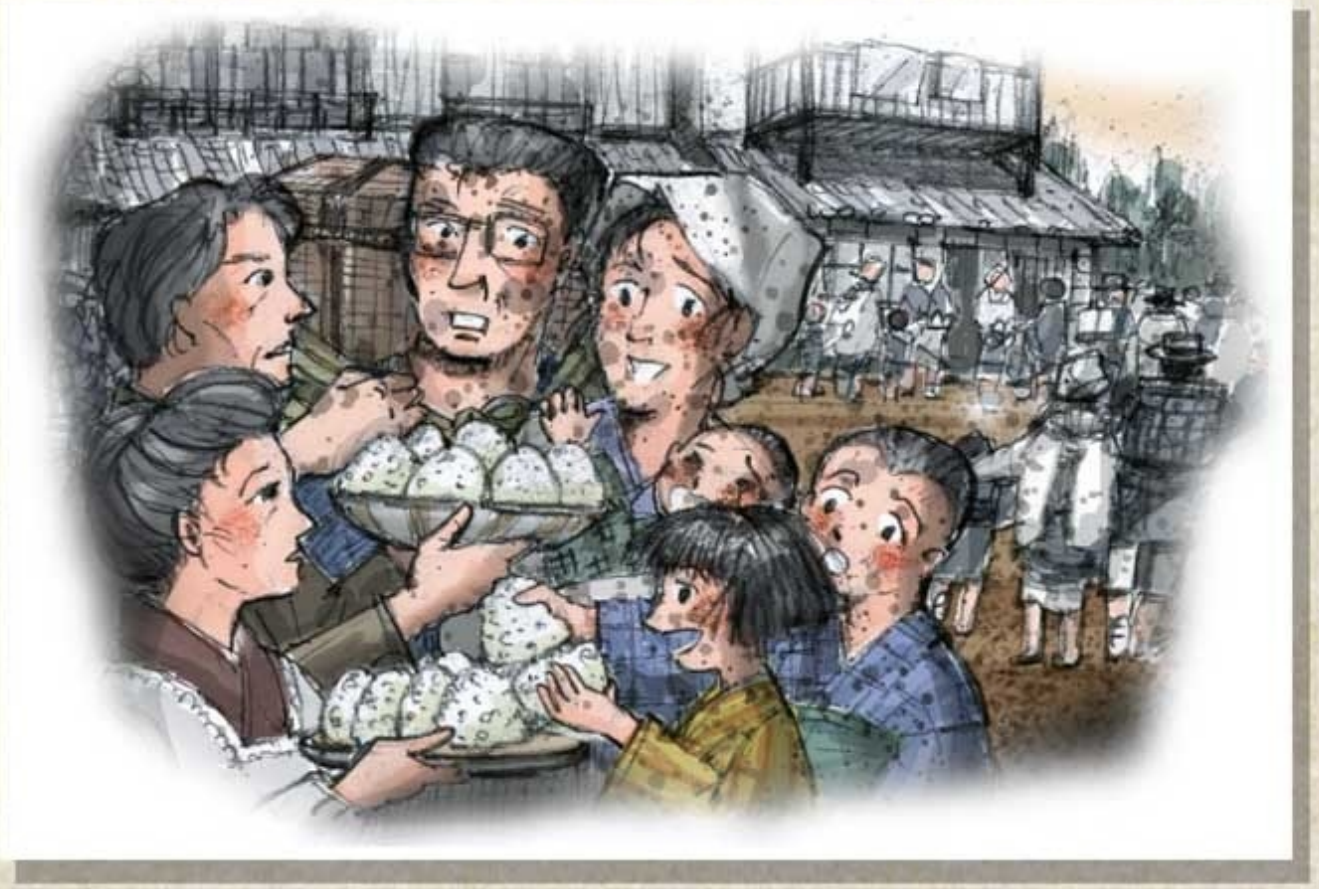
10歳くらいのころ、午の日に、引き手茶屋のおばさんを訪ねると、
決まって小づかいをくれた。穴あきの十銭玉[30]10枚（1円[31]）を、こより[32]で
まあるくつないだものを、長火鉢[33]の引き出しにたくさん入れてあって、
行けば、お友達にまでひと束ずつくれた。当時の1円はたいしたもので、
お年玉にもなかなかもらえない金額だったけど、
引き手茶屋のおばさんは、気前よくくれるのだった。
それを持って夜店に行っても、使いきれる額じゃあなかった。

吉原の格式の高い[34]大店[35]には、引き手茶屋を通さないと、あがれなかった。
金持ちの客は、引き手茶屋に寄ってから、
格式の高い大店の一流の花魁[36]のところへ繰り込んでゆく[37]。
引き手茶屋は、金持ち相手の商売だから、
おばさんは景気がよかったのだろう。
吉原は、お金で買われたお女郎[39]さんたちを逃がさないために、
堀[40]で囲んであり、出入口は大門ひとつだった。
だから、火事のたびに、逃げ場がなくて、多くの女性が焼け死んだ。

あたしが6歳の大正12年9月1日。関東大震災[41]で、
浅草は火の海になった。
両親と、兄と、弟とあたしの5人家族は、急いで観音様の境内[42]に逃げた。
観音様の本堂と五重の塔は、近隣の住民たちが大火災から守り抜いた。
だから、境内は避難民[43]でごった返して[44]いたんだ。

そこへ、花屋敷[45]のおじさんが一人で、
足に鎖をつけた子象を連れて逃げてきた。
当時、花屋敷には動物園があって、ほかの猛獣[46]も大きな象も見殺しにしたが、
子象だけは火の中から救い出したそうで、
この子象は五重の塔のそばに4〜5日つないであったと、あとで聞いた。

母親は、「象がもし暴れたら、大変だ」と、今度は上野の山[47]に向かった。
だけど、「焼け野原の東京にいてもどうしようもないから、どこでもいい、
田舎に逃げよう」。母親の決断[48]は速かった。
夫婦とも江戸っ子[49]で、田舎[50]はないのに、父親を急き立てて、一家5人で
日暮里[51]駅を目指した。
上野駅は燃えてしまったので、列車は日暮里から出たんだ。
途中、不思議なくらい焼けていない町があった。
きっと地盤[52]が固い土地なんだろう。瓦[53]は落ちても、家はつぶれていなかった。
そんな町の人たちが、ぞろぞろ逃げてくる避難民のために炊き出し[54]を
してくれていた。あたしら家族も、真っ白い大きなおにぎりを、
一人1個ずついただいた。
お昼ご飯を作っている最中に地震で引っ繰り返されたのだから、
おなかはペコペコ。この塩むすび[55]は、大変おいしかった。



あたしらは逃げるのが早かったから、日暮里駅にとまっていた列車に座ることができた。向かい合った4人がけの席に親子5人で座っていたが、このとき、ホーム側に席をとったことが、幸運を呼んだ。
列車はなかなか発車せず、人々の波が押し寄せ、もう乗りきれなくなっていたとき、知り合いの人が窓をたたいた。
「親方、どこに行くの？」と聞かれて、父親が「田舎はないから、どこか壊れてないとこまで行こうと思って」とこたえると、
「そんなら、桐生[56]に連れてくから、おれたち3人を窓から乗せてくれ」。
そこで、窓からおばあちゃんを引っ張り込んで、夫婦を入らせ、4人の席に8人以上が重なり合って、桐生まで行った。

その人の実家の離れ[57]の6畳にしばらくおいてもらい、父親は東京に往復して、家の焼け跡に小さなバラック[58]を建てて、みんなで戻った。
4年後ぐらいにやっと家を新築[59]できたっけ。

関東大震災で焼けても、親たちがいたから、子どもは苦労しなかった。
あたしは、浅草実務女学校[60]で和裁[61]を習い、どんな着物でも
仕立てられるようになっていた。
本当は子どもが好きだから、幼稚園の先生になる学校に進学したかったんだ。
それがダメなら、杉野ドレスメーカー[62]って洋裁[63]学校に行きたかった。
親にいうと、「なんでそんなに外で働きたがるんだ」と反対された。
女は家庭に入ればいい、という時代だったんだよ。

しかたなくあきらめたけど、和裁の腕だけでは後年[64]暮らしは立たなかった。
もしもあのとき、幼稚園の先生か、洋裁の先生の資格をとっていたら、
戦後の苦労は半減[65]しただろう。
あたしのほうが、先見の明[66]があったんだよ。

利口だった弟が9歳で病気で死んでから、
両親の運はだんだん悪くなっていった。
大正から昭和になって、世の中はひどく不景気[67]になった。
あたしが14歳の昭和6年には、満州事変[68]がはじまった。
はじめちゃった戦争を、終わらせる知恵が日本にはなかったんだね。
ボロボロになるまで、14年間も戦争ばっかりしてたんだから。

ひどい目にあったのは、兵隊さんだけじゃないよ。
女子どもや年寄りがどんなつらい目にあったか、
ちゃんといっておかないと、
またバカな戦争はじめたら、大変だ。
あんたたちが、兵隊にとられるようなことがあったら、
自分も家族も、それこそひどいことになるんだからね。

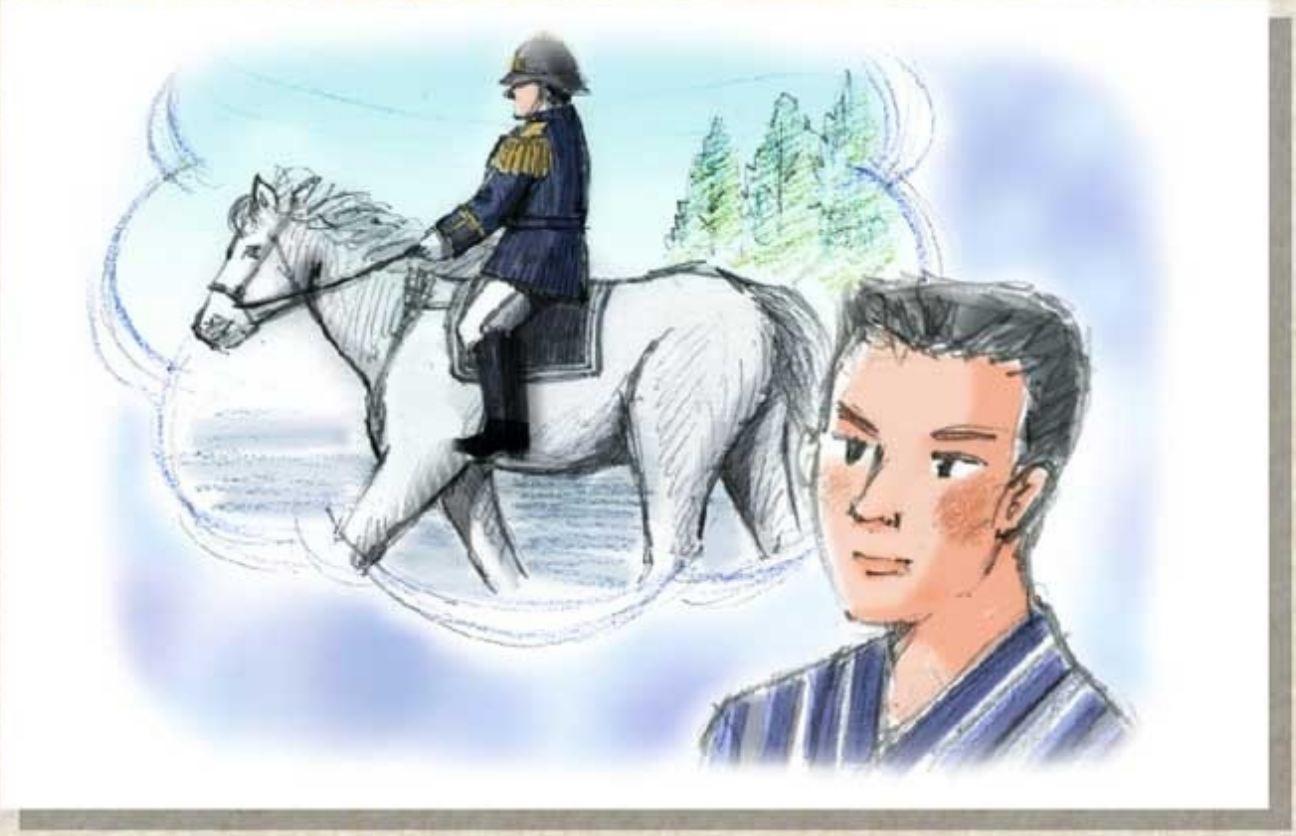
満州事変のころ、近所にかわいいぼうやがいて、
女学生[69]のあたしはその子をかわいがっていた。
その子の母親の弟で、春吉という人があたしをみそめて[70]、
将来嫁にしたいとひそかに思っていたんだそうだ。
そのとき、彼に最初の赤紙が来て、満州事変に出征[71]していった。

無事、帰還[72]した彼は、板橋[73]に移転[74]していたあたしの家を探しあてて、
嫁に欲しいといってきた。
馬に乗って結婚の申し込みに来た彼を、親も気に入って、
結婚が決まったが、彼は巡査[75]だったので、
嫁になる者の身元調査[76]はきびしく、親戚まで調べられた。
それにもパスして、あたしが20歳のとき、25歳の彼と結婚した。

親は、「なんで一人娘を、危険な職業の人にやるんだ」と、まわりにあきれられたそうだけど。そのころの結婚だ。親が気に入れば、好きも嫌いもあったもんじゃあないさ。一緒になってから好きになっていくのが普通だった。（ひお銈さんは、照れ隠しにこんな風に語ったけれど、春吉さんとお銈さんは、美男美女の熱烈な恋愛結婚だったようです。お銈さんは27歳で死別した春吉さんを生涯愛し続けていましたもの。空襲の火の中を逃げまわるときだって、亡き夫の金鵄勲章や賞状の数々を命がけで守りました。）

以前から知っていたから、あたしは結婚しても夫を「にいさん」と呼んでいた。子どもができてからは、「父さん」と呼んだ。夫は、あたしを大切にして、自由にさせてくれた。自分が勤めに行っている間にあたしが映画を見に行っても、文句はいわない優しい人だったよ。

夫は、天皇陛下が大好きで、皇宮警察[77]の騎馬警官[78]になりたくて、
警視庁に入ったが、その試験に一度落ちて、錦町警察[79]に勤めながら、
次の試験をねらっていた。
板橋に住んでいたかったが、巡査は、勤務先の近くに住む決まりだったので、
巣鴨[80]の借家[81]に引っ越した。
けど、じきに支那事変[82]が起きたんだ。



昭和11年5月に結婚して、12年7月に支那事変が起きると同時に、
夫に二度目の赤紙が来た。
長男が生まれて半年。結婚生活1年2ヶ月で、夫を兵隊にとられちゃった。
もう一度、皇宮警察の試験を受けようというときだったのに。
兵隊に行った人の給与が、留守家族に全額渡されるようになったのは、
ずっとあとのことで、あたしたちには10円[83]しか支給されなかった。
ひと月10円で暮らせるわけがなくって、実家の親の援助に頼る日々だった。

夫は、中国の戦場で部隊を救う大手柄[84]を立てたそうだけど、
ひどいマラリア[85]になって、3年ほどで帰還した。
昭和15年4月29日、天長節の日[86]に、夫は金鵄勲章[87]をもらった。

東京では一人だけだったので、新聞報道でも目立った。
16年夏の読売新聞には、あたしら一家の写真と記事が大きく載った。
騎兵[88]だった夫が、馬上から日本刀を振るって、
10人斬りの大奮闘[89]で部隊を救った手柄が書いてあり、
家族の写真では、夫が日本刀を抜いて得意そうに見せている。

「主婦の友」[90]昭和17年1月号の「総理大臣・東条英機夫人を囲む妻たちの座談会[91]」に、あたしも出たんだよ。金鵄勲章の妻として呼ばれたらしい。
その読売新聞も、「主婦の友」もとっておいたが、引っ越しを重ねるうちに、どこにしまったか、わからなくなっちゃっている。

（ひちゃんと見つかりました。）

金鵄勲章なんかもらったって、病気になって帰されたんじゃあ、
どうしようもないやね。マラリアって、ひどいんだよ。夕方の決まった
時間になると、高熱が出て、寒い寒いとガタガタ震えて、暴れ出す。
布団かぶせて大の男が馬乗り[92]になっても、振り落としてしまうほどなんだ。
帰っては来ても、夫は、マラリアで弱った体に肺結核[93]を発症[94]。
警察の仕事が務まらなくなって、退職しなけりゃならなかった。

戦場で病気になって帰っても、何の補償[95]もなかったんだよね。
工場に再就職[96]はしたものの、昭和18年5月19日に、32歳の若さで
死んじゃった。
かわいそうだよ。子どもたちのかわいい盛り[97]も見られないでさ。

夫の告別式は、実家の父親の百か日の法要の日[98]と重なって忙しかった。
父親の死より、夫の死が後になったのは、せめてもの幸いだった。
戦争で病気になったんだから戦病死[99]と認められ、あたしは九州の部隊に
書類を出した。ところが、その部隊が沖縄で玉砕[100]しちゃって、
戦争が終わったら、提出した死亡診断書[101]が見つからなくなっていた。
それっきりうやむや[102]にされて、結果、戦病死とは認めてもらえなかったよ。

長男が生まれて半年で、夫は戦争に行っちゃった。
次男が生まれて半年で、今度は帰れないあの世に行っちゃった。
結局、あたしは、いつも誰も頼れないまま、
一人でがんばるしかなかったんだ。
実家の父親も、戦争中に60代で死んじゃったしね。
男を頼ることのできない運命なんだろうね。

夫が死んだとき、あの人の姉さんはひどかったよ。
「あんたたち親子の面倒までは見られないから」といって、
夫のお骨を勝手に九州に持って帰ってお墓に入れちゃった。
姉さん一家は九州に疎開[103]しちゃったし、
それっきり、どこのお寺に葬ったのかも知らない。
（ひ 春吉さんのお姉さんは、27歳のお銚さんが再婚しやすいように、
遺骨を引きとったのかもしれませんね。）

あとになって、「あのときは、何にもしてやれなくてすまなかった。
親子で九州へ遊びに来てください」と手紙が来たけど、
食うや食わず[104]の最中に、九州まで行く汽車賃[105]が出せるわけないじゃないか。
切符でも送ってくれるんなら、ともかく。

結局、夫のお墓参りは一度もしたことがない。仏壇でだけ、供養[106]している。
戒名[107]も、こっちの檀那寺であらためてつけてもらって、位牌[108]を作ったんだ。

父も夫も死んじゃって、母と子ども2人と巣鴨の借家で暮らしていた。
やがて、東京の空襲[109]が激しくなり、3月10日だけじゃなく、
毎晩、毎晩、空襲警報[110]のサイレンで起こされた。
上の子は1年生だったが、田舎がないので、集団疎開[111]に出した。
そして、昭和20年4月13日夜。豊島区のほとんどが火の海になったんだ。
330機のB29[112]が、豊島区を中心に火の雨を降らせた。
焼夷弾ってやつは、1個のさやの中に38発も入ってて、
空の上で38倍にはじけ飛んで、燃えながら落ちてくるんだ。
何万の火の玉が降ってくるんだから、下にいる者は生きた心地はしないよ。

巣鴨は、まわり中が火だったから、逃げ道がまるで見つからなかった。
2歳半の次男をおぶって、ねんねこ[113]を着て、掛け布団一枚かぶって、
どっちに逃げればいいかわからない状態だった。
隣組[114]の組織なんて、何の役にも立ちゃあしなかったよ。
火の雨の中を逃げまどって、水のあるところへ行った。
貯水槽[115]の水を、バケツで何杯も何杯もかけてもらって、布団をぐっしょり
ぬらしてかぶって、火の中を逃げまわったら、布団が乾いて燃え出した。
それを捨てて走ったら、誰かが「ねんねこ、ぬげー！」って叫んだ。
背中が燃え出していたんだ。
東西南北どっちを見ても、火が燃えてるんだから、もう地獄だったね。
燃え出したねんねこはぬぎ捨てたが、子どもが着ていた綿入れの着物にも、
火の粉が降りかかって、焼けこげた穴がいくつもあいた。
次男の背中には一生、やけどのあとが残っていたよ。
そのときの子どもの着物は、
まだとってある。

綿入れの一つ身[116]の産着[117]の裾に、
ありあわせの布を継ぎ足して
綿を入れた仕立て直し[118]の着物
でね。焼けこげた穴がいくつも
あいているよ。

焼けこげた次男の着物

そのあとは、どうなったか、わかんない。
焼夷弾の雨にあたらなかったのが不思議だった。
そこら中の地面に、たけのこのように突き刺さってるものを、
「何ですか」って聞いたら、「焼夷弾だ」っていわれた。爆弾も落ちて、
吹っ飛ばされた。朝になって、爆弾の落ちた丸い穴の近くにいたら、
「ここで死ななかったなんて、奇跡だ」と驚かれた。
幸いにも、空襲の晩、母親は、府中[119]の叔父さんの家に泊まっていて、助かった。
あたしらも府中に行ったが、長く泊めてもらえる状態ではなかった。
叔父さんだけは、とことん面倒見てくれようとしたんだが、
ほかの家族の嫌がらせに耐えられず、あてもなく飛び出した。
無一文[120]の焼け出されは、親戚にだっていい顔されるわけがないからね。
みんな、自分たちが食べるにも不自由してたんだから。
それからの住まいの苦労は、ひどかったよ。落ち着く暇もなかった。
立て続けに引っ越したこともある。
あのころはね、家が広くたって、焼け出されの一文なし[121]を泊めてやろう
なんて家は、一軒もなかったよ。みんな冷たかった。

終戦の前の日[122]に、疎開しようと埼玉へ引っ越してしまった。
そのとたん、戦争が終わったので、引っ越し荷物を運んできた牛車[123]に、
そのまま東京へ戻ってもらった。
（ひ 木でできた荷車を牛に引かせていました。当時の運送屋さんです。
トラックはみんな軍隊にとられて、民間には荷車しかなかったのです。）
無駄なことをしたわけだけど、でもうれしかった。日本が負けたんだが、
もう焼夷弾に追っかけられないんだから、ただただ、ほっとした。

それからも、東京で焼け残った家を借りるのは大変だった。
物価[124]は、どんどんあがったしね。
出征中の軍医[125]さんが借りている家が、奥さんも疎開して空き家になっているから、住んでいていいといわれたんだけど、空き家になってから、ガラス戸も障子も襖もみんな盗まれちゃっていて、雨戸しかない。
開ければ、寒風[126]が吹き抜けるし、閉めれば真っ暗だ。
屋根しかない家に、家賃払って、ひと冬住んだ。

そんなとき、税金の通知[127]が来たから、税務署にどなり込んだ。
「えらい人を出してくれ」っていって、「焼け出されに、なんで税金かけるんだ」って聞いたら、いま年に一人4000円かかる。お宅は4人だから、16000円の収入があったとみなして、その税金だという。
「そんなお金があったら、こんな苦労はしてないわよ。払わなかったらどうするんですか」って聞いたら、「差し押さえ[128]だ」って。

次の日、税務署から調べに来た人が、家ん中ひと目見て、
「奥さん、税金なんかほっときな。鍋、釜、布団も、仏壇も、
差し押さえにはならないから」といって帰った。
家にも困ったが、配給[129]はろくそっぽない[130]し、闇[131]で食料買うにも、
買い出しに行くにもお金がいる。
女所帯[132]で子ども抱えて、何をどれだけやって稼いだか、覚えきれないさ。
朝霞の畑に行って、ニンジンを5貫目[134]400円で買って、
電車乗り継いで船橋[135]までかついでいって、500円で売った。
100円もうけても、電車賃は高いし、乗り換え駅は、池袋も秋葉原[136]も
階段だらけだし、わりのあわない仕事だったよ。
死んだ父親が鍛冶屋の親方で、テキ屋[137]の親分と知り合いだった。
テキ屋から、「浅草においで」といわれて、道端にゴザ[138]しいて、
いろんなものを売ったよ。みじめでさ、涙が出た。

そのうち、テキ屋の子分に結婚しようといわれ、親分にいうと、
「そいつはまずい。浅草に来ないほうがいいから」と、
板橋のテキ屋の親分に紹介してくれた。
やれることは何でもしたよ。何しろ、家族に頼れる男はいないんだから。

だけど、再婚[139]なんて、まったく考えなかった。
20代で再婚したら、また子どもが生まれるだろう。
そのとき、上の二人がせつない思いをする。
子どもたちを泣かせるようなことは、絶対できないからね。
女一人でがんばることに決めていた。

住まいも転々とした[140]が、仕事も転々とした。
女に勤め先なんて、ほとんどない時代だった。

テキ屋のよしず張り[141]の売り場が一つあいていたとき、常盤台[142]の八百屋が、
「キュウリを売りな」と、品物をまわしてくれた。
毎日仕入れに行って、安く売ったら、飛ぶように売れた。
だけど、あたしは町育ちだから、キュウリが夏だけだって知らなかったんだ。
（けいまみたいにハウス栽培はないので、夏野菜は夏だけだった。）
キュウリやナスが終わったら、冬野菜はうちにまわしてくれる余裕が
なくなり、自分でホウレン草の産地まで、毎日何度も買い出しに行ったよ。
配給じゃあ足りないから、闇の食品はどんどん売れた。

でも、運ぶ途中で警察に捕まれば、全部没収[143]された。
運び屋から没収した米や野菜は、いったい誰の口に入ったんだろうね。

下駄[144]を、栃木県まで買いに行って売ったこともある。
当時は、下駄ばきの人が多かったから、売れたよ。
鼻緒[145]のすげ方[146]も覚えた。
（け靴なんか高くて、めったに買えない時代だった。）
「東京で下駄の問屋[147]になれ。そうすれば買い出しに来なくても送ってやる」
っていわれたけど、住む家さえ安定してないのに、問屋をやる力はなかった。
勤め口もあったけどね。月給だと、給料もらう日までのお金がない。
日銭[148]が入らなきゃ、今日のご飯がないという自転車操業[149]だから、
いい仕事があっても、行けなかった。
食べるだけで、精いっぱいの時代が長かったよ。

4畳半ひと間を4500円で借りていたころ、都営住宅[150]に申し込んだけど、
抽選に当たらないから、入れなかった。
都営の家賃は月1500円。
ひどく困ってる者から入れてくれりゃいいのに、
議員や役所の者にコネ[151]のある、困ってもいないやつが入れるのだった。
公団住宅[152]は、収入の少ない者は申し込むことさえできなかった。
金のない者は安い家に入れてもらえない、変な仕組みだったよ。

家賃が払えず、2ヶ月ためたら、いついっか[153]までに立ち退きます、
と誓約書[154]をとられた。それでも行き場がなかったら、大家が踏み込んできて、
縫っていた仕立物[155]をほうり出された。
いつもいつも、住まいに困っていて、19年間で10回以上、
引っ越しを繰り返した。

貧乏人は蔑まれる[156]。身内からさえ疎まれる[157]。
けど、あたしが怠けて貧乏になったわけじゃないよ。
国が起こした戦争で、
夫も財産もすべて奪われたから、貧乏してるんじゃないか。

いまなら、津波で家をなくしても、仮設住宅[158]に住める。
(**け**それだって帰るあてもなく、狭い仮設住宅に何年も住まわされるのは、
なんともつらい話だが。)
空襲で焼け出された者は、
仮設住宅の半分もない、4畳半ひと間だって、
法外な[159]家賃をとられてたんだ。

国は、何にも助けちゃあくれなかった。
空襲の焼け出されには、何の補償もしなかったんだよ。

貧乏は恥ではないが、せつなかったさ。

家を借りるお金がなくて困っていたとき、池袋の町を歩いていて、
はんこ屋[160]の店先に親友を見つけた。

浅草で育ったおさななじみ[161]が、はんこ屋の奥さんになっていた。
はんこ屋の店にあがって、二人が女学校時代の丁寧な言葉づかいで
深々とおじぎをしてあいさつし合っていたら、彼女のご主人に、
「あんたたち、そんな丁寧語であいさつするの」とびっくりされた。

彼女のご主人はいい人でね。
「お金貸すから、家探しなさい」といってくれた。
昭和39年のことだ。地獄で仏[162]とは、このことだったね。

都内は高いので、埼玉の、鶴瀬[163]の駅から歩いて30分、畑の中の貸家に入った。近所に風呂屋がない。自分で風呂桶[164]を買うしかなくて、鶴瀬の燃料屋さんが、月賦[165]ですぐにとりつけてくれたときは恩に着た[166]ね。でも、風呂はついたが、薪[167]も、石炭も、薪を割る鉈[168]も買わなくちゃならなくって、大変だった。

鶴瀬から池袋のはんこ屋に通勤して、給料では足りないから、夜なべ[169]で着物の仕立てをしていた。

そこに2年住んだところで、家主が住むからと追い出された。近くに家を見つけて移ったが、自分で買った2万円の風呂桶を、そのままおいて出てしまった。

もったいなかったよ。あれは買いとらせるべきだったと、あとあとまで悔しい思いが残った。

今度の家には10年以上住んだけど、やはり売るので出てくれといわれ、
その後、みずほ台[170]に25年住み、いまのアパートに来て10年になる。
ここも、どうなるかわからない古いアパートだ。

あたしは、病院の付添婦[171]を長年やった。
完全看護じゃない時代、付添婦は病人のそばに泊まり込んで世話をしたんだ。
最期まで付き添ったとき、遺族が葬式の手配がわからず、
お寺とのつきあいもなく、右往左往する[172]ので、いろいろ教えたりしたものだ。

書道師範[173]の資格をとって、子どもたちに書道と一緒にお行儀を教えていた
楽しい時期もあった。子どもたちがきちんとあいさつをするようになって、
親たちが驚いていたものだ。

次男一家が近くにいて、心丈夫[174]だったのに、あたしの77歳の誕生日に
次男が突然死んだ。事故だった。
あまりのことに、何も考えられなくなった。
わが家の男は、みんな運が弱いんだね。女ばかりしっかりしていてさ。

あたしは、派出婦[175]などで無理を重ねたから、糖尿病を悪化[176]させて、
心臓も悪くなり、近ごろはほとんど目が見えない。耳も遠い。
急に歩けなくなっちゃって、不自由だけど、寝たきりでオムツばっかりに
なるのはまっぴらだから、意地をはって起きあがる。

いまが、いちばん楽かもしれないね。
あたしは、何も頼んでないのに、家族や、いろんな介護の人たちが、
みんなで相談して、いいようにしてくれる。ありがたいよ。
朝は一人でパンを食べるが、昼と夕方にヘルパーさんが来て、
ご飯を作ってくれる。
座って自分で食べられる。手はしっかりしているから、箸も使える。
これ以上、世話をかけないようがんばっているんだ。

寿命[177]はわからない。死に支度は、できるとこまでやってある。
あとは、おまかせ。
ただ、子孫の代に、また徴兵[178]なんてことがないように、
みんなで気をつけてほしいもんだ。

あたしは目が見えないから、いつもラジオを聴いている。
イヤホンをいちばん大きい音にして、ニュースは必ず聞く。

近ごろ、いろんなことが心配になってきた。

かつて、あたしらは、国にだまされたんだ。踊らされたんだ。
昭和初期のように、
右向け右、右へならえ、なんて踊らされていたら、
またまたひどいことになるよ。
歴史は繰り返しちゃあいけない。

原発[179]だって、同じだ。
福島でどれほどの人が泣かされてるか、ちゃんと助けてもいないのに、
再稼働[180]したいとか、外国に売ろうだなんて、
国は、何考えてるんだ。

信用しちゃダメだ。
戦争でひどい目にあったあたしは、
国を信用しないくせがついている。
そのぐらい、目を凝らしていないと、危ない目にあうよ。

とにかく、戦争をする国にしちゃあダメなんだからね。
戦争だけは、しちゃあならないんだよ。
戦争で、いいことなんか、何にもないんだからね。

これが、おばあちゃんの遺言です。

2013年5月

語り手 久米 銈 【聞き書き 中谷 久子】

本文の注釈（2014/8/20版）

１　遺言＝死ぬ前に言い残す言葉
２　赤紙＝戦争になると、国民を軍隊に呼び出して集める命令文書。日本軍は赤い紙を使っていたため、こう呼ばれた
３　大正6年＝1917年。大正は、1912年7月30日～1926年12月25日をさす日本の年号。平成の2つ前の時代
４　先立つ＝先に死ぬこと
５　ヘルパーさん＝年寄りや体の不自由な人の世話をする人
６　死に支度＝死を迎えるための用意
７　檀那寺＝先祖代々のお墓があったり、法事をしてもらったりするお寺
８　枕経＝人が死んで、お棺に納める前にお経をあげること
９　お布施＝お坊さんにお経をあげてもらうときなどに渡すお礼のお金
10　末寺＝ある宗派に入っているお寺
11　柩＝死んだ人の体を納める箱、お棺
12　焼き場＝死んだ人の体を焼く場所
13　費用＝あることをするのに必要なお金
14　まかなう＝用意する
15　昭和＝1926年12月25日～1989年年1月7日をさす日本の年号。平成の一つ前の時代
16　達者＝元気で丈夫なこと
17　焼夷弾＝人を殺したり、建物などを焼いたりするための爆弾
18　一代記＝ある人の一生の記録
19　観音様＝東京都台東区にある浅草寺のこと
20　お富士さんのお灸＝灸は、もぐさと呼ばれる植物を体のツボの上に乗せ、火をつけて燃やし、病気を治す方法のこと。富士山をあがめている浅間神社では灸の治療を行っており、「お富士様のお灸」と呼ばれている
21　鍛冶職＝鉄などの金属を熱して何度も打ったり水で冷やしたりして硬くし、いろいろな道具を作る仕事
22　親方＝弟子を教える立場にある一人前の職人
23　門扉＝敷地の出入り口にある門の戸、扉
24　吉原遊郭＝遊郭は、お金をとって男の人の相手をする遊女がいる店が多く集まっている区域のこと。吉原は現在の浅草にある地名
25　大門＝遊郭の入り口の門

26　引き手茶屋＝遊郭の中にある店。客はまず、ここでお酒を飲んだり料理を選んだりして過ごし、遊女のいる店に遊びに行った
27　午の日＝日本で昔使われていた暦、カレンダーでは年、月、日を表すのに干支が使われていた。この暦は、今でも伝統行事などでは使われている
28　縁日＝ある神様や仏様に縁のある日。この日にお参りすると特別なお恵みがあるとされる
29　夜店＝祭りのときなどに出る屋台
30　十銭玉＝1円の10分の1。10枚で1円。このころの十銭硬貨には穴があいていた
31　1円＝お銚さんが10歳だった昭和2［1927］年、銀座天国（てんくに）の天丼が1円20銭（『物価の世相100年』岩崎爾郎著／読売新聞社より）。ちなみに、2014年8月現在、A丼1,620円（海老2尾・きす・イカかき揚・野菜2点）～C丼3,024円（海老2尾・きす・文甲イカ・大海老・野菜2点）
銀座天国 http://www.tenkuni.com/regular_1f.html
32　こより＝細く切った紙をひねってひものようにして、穴が開いているものをとじるのに使う
33　長火鉢＝火鉢は、灰を入れて、炭火をおこし、部屋を暖めたり、お湯をわかしたりする道具。長火鉢は、長方形の箱の形をしており、引き出しなどがついている
34　格式の高い＝立派な
35　大店＝大きな店
36　花魁＝身分、位の高い遊女
37　繰り込む＝　大勢で次々にある場所に行くこと
38　景気がよかった＝繁盛していた、もうかっていた
39　お女郎＝遊女
40　堀＝地面を掘って水を入れてあるところ
41　関東大震災＝関東周辺に起きたマグニチュード7.9、最大震度６の大地震。亡くなったり行方不明になったりした人は約14万人にのぼる
42　境内＝神社やお寺の敷地
43　避難民＝火事や地震、戦争などで逃げてきた人たち
44　ごった返す＝人がたくさん集まって混み合うこと
45　花屋敷＝浅草にある遊園地（現在の花やしき）

46　猛獣＝性質の荒々しい肉食動物。このころの花屋敷では象のほか、トラや、クマライオンなども飼われていたが、「関東大震災の際に避難民が花やしきに集まったため、多くの動物を薬殺しなければなりませんでした」と、敷地内の鳥獣供養碑に記されている
47　上野の山＝東京都台東区にある上野公園。台地にあったので上野の山とも呼ばれた
48　決断＝これからしたいこと、したくないことをはっきり決めること
49　江戸っ子＝東京の下町で生まれ育った人
50　田舎＝地方にある故郷
51　日暮里＝東京都荒川区の地名
52　地盤＝地面からある程度の深さまでの地層。ここでは特に建物を支える基礎となる部分
53　瓦＝屋根ふきに使われる建築の材料
54　炊き出し＝災害が起きたときなどに、食べ物を配ること
55　塩むすび＝具や海苔を使わず、塩味だけをつけたおむすび
56　桐生＝群馬県の地名
57　離れ＝敷地の中心にある建物［母屋］とは別の建物
58　バラック＝急いで作った粗末な建物。仮の小屋
59　新築＝新しく建物を建てること
60　浅草実務女学校＝東京市立浅草実務女学校家政部のこと。のちの東京都立台東商業高等学校。後身は東京都立浅草高等学校
61　和裁＝着物を縫うこと。その方法
62　杉野ドレスメーカー＝のちのドレスメーカー学院。ファッションの専門学校。着物を着る人が多かった時代に洋服の縫い方を教えていた
63　洋裁＝洋服を縫うこと
64　後年＝あるときから何年かたった後のこと
65　半減＝半分になること
66　先見の明＝先のことを見通す力
67　不景気＝お金を生み出したり使ったりする世の中の動きが悪くなること
68　満州事変＝昭和6［1931］年9月18日にはじまった、日本軍が中国東北部［満州は昔の中国東北部の名前］に攻め入った戦争
69　女学生＝昔の高等女学校［今の中学1年生～高校2年生にあたる］に通っていた女子学生
70　みそめる＝ひと目見て好きになること

71　出征＝軍隊に入って戦地に行くこと
72　帰還＝戦地からふるさとに帰ってくること
73　板橋＝東京都の地名
74　移転＝引っ越し
75　巡査＝警察官
76　身元調査＝その人の生まれや家柄、身分、学歴などを調べること
77　皇宮警察＝御所や皇居などを警備したり、天皇や皇族を護衛したりする警察
78　騎馬警官＝馬に乗っている警官
79　錦町警察＝東京都にある現在の神田警察署
80　巣鴨＝東京都豊島区の地名
81　借家＝人から借りた家
82　支那事変＝昭和12年［1937］7月に始まった日本と中国との戦争。日中戦争
83　10円＝昭和12年の日当・日給は2円20銭、月給として「職工の月給百円時代」とある（『物価の世相100年』岩崎爾郎著／読売新聞社より）
84　大手柄＝立派な働き
85　マラリア＝熱帯地方などにいる蚊にさされてうつる病気。高い熱が出て、死ぬこともある
86　天長節の日＝天皇の誕生日
87　金鵄勲章＝戦地での手柄がすぐれていた軍人に国が与えた賞
88　騎兵＝馬に乗って戦う兵隊
89　大奮闘＝力いっぱい戦うこと
90　「主婦の友」＝雑誌の名前
91　座談会＝数人が集まり、ある話題について気楽に話し合う会
92　馬乗り＝馬に乗るような姿勢で、人にまたがること
93　肺結核＝熱やせきが出て、昔は助からないことも多かった病気
94　発症＝病気になること、その病気の症状が出ること
95　補償＝健康や利益が損なわれたことを金銭などで補うこと
96　再就職＝仕事をやめたあと、もう一度、仕事につくこと

97　盛り＝いちばん勢いがある時期
98　百か日の法要の日＝人が死んでから100日目に行う法事
99　戦病死＝軍人が戦地でかかった病気で死ぬこと
100　玉砕＝軍の部隊が一人残らず死ぬこと
101　死亡診断書＝人が死んだことを医者が確認して作る書類
102　うやむや＝はっきりしないこと。あいまいにすること
103　疎開＝空襲など、戦争の被害を避けるために、都会から田舎に逃れること
104　食うや食わず＝食事を満足にとらない状態
105　汽車賃＝列車の運賃
106　供養＝死んだ人のあの世での幸福を祈って拝んだり、お供え物をしたりすること
107　戒名＝お寺のお坊さんに死んだ人につけてもらう名前
108　位牌＝戒名などが書いてある木の札
109　空襲＝飛行機で爆弾を落とすこと
110　空襲警報＝敵の軍隊の飛行機が飛んできて、空襲を受ける危険があるときに人々に知らせること
111　集団疎開＝学校ごとに田舎に疎開すること
112　B29＝アメリカ軍が使っていた大型の爆撃機
113　ねんねこ＝お母さんが赤ちゃんをおんぶした上から着る上着、半纏。寒さをしのぐために布と布の間に綿が入っている
114　隣組＝戦争中に町内で助け合うために5～10軒で作った集まり。国の命令をみんなに伝える働きももっていた
115　貯水槽＝水をためておく大きな容器
116　一つ身＝後ろの部分を1枚の布で作ってある子ども用の服
117　産着＝生まれて間もない子どもに着せる服、着物
118　仕立て直し＝新しい服に作り替えること
119　府中＝東京都の地名
120　無一文＝お金をまったくもっていないこと
121　一文なし＝無一文と同じ
122　終戦の前の日＝戦争が終わったのは、昭和20［1945］年8月15日
123　牛車＝牛に引かせる荷車
124　物価＝物の値段
125　軍医＝軍隊の中にいる医者
126　寒風＝冬の寒い風

127　通知＝知らせ。ここでは、税金を納めるようにという知らせ
128　差し押さえ＝財産を無理やり取り上げること
129　配給＝戦争中や戦争が終わった後に、不足しがちな食べ物や品物を一定の割合で売ること
130　ろくそっぽない＝「ろくすっぽ、ろくそっぽう～ない」で、何かがほとんどないこと。「ろくそっぽ」は、お銚さんの江戸っ子らしい発音
131　闇＝ちゃんとした取り引きではなく、ひそかに物を売り買いすること
132　女所帯＝家族の中に女の人しかいないこと
133　朝霞＝埼玉県の地名
134　5貫目＝18.75キロ
135　船橋＝千葉県の地名
136　池袋・秋葉原＝２つとも東京都の地名
137　テキ屋＝道ばたやお寺の境内などで、ゴザや台の上に商品を並べて商売をしたり、見せ物などを行ったりする人
138　ゴザ＝イグサで編んだ敷物
139　再婚＝夫や妻と死に別れたり別れたりした後にもう一度結婚すること
140　転々とする＝住まいなどが次々に変わること
141　よしず張り＝植物のヨシで編んだすだれで囲んだ小屋や店
142　常盤台＝東京都板橋区の地名
143　没収＝取り上げられること
144　下駄＝着物を着るときにはく、木のはきもの
145　鼻緒＝下駄やぞうりについている、足の指ではさむひも
146　すげ方＝鼻緒をとりつける方法
147　問屋＝商品を仕入れて、ほかの小売り店に売る店
148　日銭＝毎日、収入として入ってくるお金
149　自転車操業＝お金を借りて返すことをくり返しながらなんとかやっていくこと。自転車はこぎ続けている間は倒れないが、止まると倒れてしまうことからのたとえ。お銚さんの場合は、まとまったお金を借りる余裕もなく、明日の元手を残す以外は、その日の収入をその日に使うだけで精一杯の暮らしだった
150　都営住宅＝東京都が管理する住宅。収入が少ない人向けだった
151　コネ＝親しい関係を意味する「コネクション」を省略した言葉
152　公団住宅＝日本住宅公団が戦後の住宅不足をなんとかするために建設した住宅
153　いついっか＝「何時何日」と書く。はっきりした日付

154　誓約書＝ある人に、何かを行うことを約束する書類
155　仕立物＝他人から預かって縫っている着物
156　蔑まれる＝自分より下にあるものとしてバカにされること
157　疎まれる＝嫌われ、遠ざけられること
158　仮設住宅＝自然災害で住宅が被害を受けた人のために、都道府県が建てる一時的な住宅
159　法外な＝ふつうに考えられるレベルをはるかに越え、とんでもなく多い
160　はんこ屋＝印判を扱っている店
161　おさななじみ＝子どものころに仲よくしていた友達
162　地獄で仏＝苦しいときに思いがけない助けに出合ったうれしさを表すたとえ
163　鶴瀬＝埼玉県富士見市の地名
164　風呂桶＝浴槽。昔は大きな木の桶でできたものが多かった
165　月賦＝代金を一度に払わずに、月々に分けて払うこと
166　恩に着る＝人にしてもらったことをありがたく思うこと
167　薪＝燃料にする木
168　鉈＝幅と厚みのある刃物に柄がついている道具
169　夜なべ＝夜、仕事をすること
170　みずほ台＝埼玉県富士見市の地名
171　付添婦＝病院で患者の世話をする人。その仕事
172　右往左往する＝心の落ち着きをなくして、あわてたり混乱したりすること
173　書道師範＝習字の先生
174　心丈夫＝頼りになる人がいて、安心できること
175　派出婦＝人の家に出向いて家事などをする人、お手伝いさん
176　悪化＝しだいに悪くなること
177　寿命＝生まれてから死ぬまでの時間。命の長さ
178　徴兵＝国が国民を強制的に集めて、軍隊に入れること
179　原発＝原子力発電所
180　再稼働＝止めていた機械などをもう一度動かすこと

戦中戦後の東京の食糧事情

中谷 久子

久米 銈さんに取材できる時間には限りがあったので、戦後の食糧難について彼女の体験を詳しくお聞きすることができませんでした。
そこで、補足説明として、お銈さんと同じ東京で、母と二人で暮らし、深刻な食糧不足を味わった私の12歳から17歳ごろまでの体験を書いてみます。

◆米の代わりにフスマと大豆カス、虫のついた砂糖

戦争中のお米の配給は、はじめのうちは大人一人一日2合3勺（180mlのカップ2、3杯）でした。びっくりする多さでしょう。でも当時は、米からタンパク質も何もかも、栄養全般をとらねばならず、おかずはわずかしか食べない時代でした。

この配給量はどんどん減らされ、やがて国中に米がなくなると、何でも米の代わりだといって配給されるようになりました。

一番ひどかった代用食は、小麦のフスマ。いまではブランという健康食品として売られていますが、加工技術のなかった戦中戦後は、小麦からむいた薄皮そのままでした。枕に入れるソバガラみたいなもので、そんなもの食べろと言われても無理でした。何かに混ぜてしっかり煮ても硬いまま、胃腸を素通りして栄養にはなりません。

大豆カスも困りました。大豆油をしぼりとったカスで、動物のエサにしかならないものです。ぺしゃんこで、がちがちに硬くて、燃料がないからそんなにいつまでも煮ていられず、おなかの足しにするのは困難でした。圧力鍋もありませんからね。

戦後は、米がないから、アメリカの援助物資の赤ザラメ（砂糖）が配給され、米の通帳（米穀配給通帳）に何日分か代用食で配給したというスタンプを押されました。
虫がわいている砂糖もありましたが、気にしてはいられません。カルメ焼き（赤ザラメにわずかな水と重曹を混ぜて作る砂糖菓子）を自分で焼いて、ひもじさを紛らわしました。でも、砂糖を米の代わりにしろなんて、変じゃないかと子ども心に思っていました。

援助物資のトウモロコシ粉だけはよかったです。当時、はやりのリング状に焼ける鋳物の鍋で、大きなドーナッツ型の甘いパンを焼きました。小麦粉がなくても、このトウモロコシ粉と砂糖とふくらし粉だけのパンは結構おいしかったです。

たまに本物の米が配給されても、玄米（糠を除いてない茶色の米）でした。白く精米する電力もなかったからでしょう。
圧力釜なんてありませんし、ゆっくりおかゆに炊く燃料もないので、誰かが考え出した一升瓶精米法が戦争中から大流行していました。一升瓶に玄米を入れ、竹の棒で、暇さえあれば何時間でも交代で突っつくのです。そうやって白い米と糠に分けました。
そんな米でも、あればうれしくて、サツマ芋や道端の草などを入れて、おかゆにしました。
白いご飯なんて口には入りません。もちろんおにぎりも作れません。

◆イワシの配給は夜だった

戦争中から、魚と野菜は、隣組（戦争中、国の命令をみんなに伝える手段として作られた町内の組織）単位で配給されました。うちの隣組は8軒で、組長は順番に務めさせられました。

8つに仕切られた木箱に、各家の名前と人数が書いてあるものを組長が保管していて、魚の配給を知らせるベルが聞こえると、みんな組長宅の前に集まり、自分の箱に入れられたものを文句も言わずに買いました。
野菜はもっと大変。全員の分をまとめて置いて行かれるので、自分たちで切り分けなければならず、大根1本を8軒で分けるなど、組長は恨まれないように切るのが大変でした。

これは戦後だと思うのですが、ときどき、夜の9時半にガランガランとベルが鳴り、早寝のみんなも飛び起きました。魚屋さんがトラックからイワシを一人6匹くらいずつ、みんなの鍋に入れてくれるのです。
なぜいつも夜の9時半かというと、氷が足りないからでした。氷がなければどんどん腐ってしまうイワシを、千葉県から私の住む東京の目黒まで運んでくると、夜の9時半になるわけです。
夜だっておなかがすいていますから、一人6匹の新鮮なイワシを母と二人1匹ずつ生でむさぼりました。それから七輪に火をおこし、残りを塩焼きにします（冷蔵庫なんてありませんからね）。
あくる朝は、ご飯がなくてもイワシがごちそうです。はらわたまできれいに食べます。
骨は焼き直して食べ、頭としっぽは焼いて乾かしてふりかけにしました。

イワシのありがたさは忘れられず、いまでも大好きです。いまは頭も骨も捨てますけれどね。

◆闇の食糧で命をつなぐ

そんな配給も十分にはなく、「法を守る」と言って、配給物資しか食べないで餓死した判事さんがいました。
でも、私たちは飢えるわけにはいきませんから、しかたなく闇の食糧を買いました。

闇市は、にぎやかでした。水分ばかり多い雑炊が飛ぶように売れていました。ふかし芋も、10円でわずかばかり。お金がないから栄養になるものは思うように買えません。

昭和23年（1948年）の冬、私が船橋（千葉県）などの駅前で、ノートや飴を売っていたころ（ニンジンをかついだお銭さんと船橋ですれ違っていたかもしれません）、闇屋が道端でサンマを売り始めることがありました。1尾10円。私はいつも2尾買いました。

闇の仕組みはこうでした。
サンマ漁船は漁港に入ってしまうと、全部公定価格で売らねばなりません。それが配給に回る分です。
でも、公定価格では漁船は儲からないので、沖で闇屋の小舟に高く売るのです。それが堂々と道端で売られていました。
私たちは、そういうものを買わなければ、タンパク質が極端に不足していたのです。肉なんて、食べたことも見たこともありませんでした。

精製していない小麦粉で作った真っ黒い小さなコッペパンが10円、菓子パンが25円。空腹に耐えられないときだけ、10円のを1個買いました。
パンに比べて、サンマの闇値は、あまり高くなかったようです。大漁だったのでしょうね。

◆タンポポとイナゴはごちそう

お銭さんは、キュウリやホウレンソウを売ったら飛ぶように売れたと言われましたが、目黒では、闇の野菜はあまり売っていなかったように思います。
私の家の前の道は舗装されていなかったので、草が生えると、ハコベやタンポポはごちそうで、アカザもギシギシも我慢して食べました。ツクシやノビルなど、「上等の草」は街には生えませんでした。

うちにも小さな庭があったので、サツマ芋やカボチャ、ジャガ芋を少しだけ植えていました。

サツマ芋は、いまみたいに甘いものではありませんでしたが、収量の多い品種でした。味はどうでも、栄養になればよかったのです。
それに対して、サツマ芋の茎の部分は、それ自体が味がよいので、おいしく食べることができ、当時は大事な栄養源でした。
いまでも手に入れば、炒め煮にします。

カボチャは、竿を立てて、つるを屋根にのぼらせました。平屋の瓦屋根にはしごをかけて、毎朝登って、雌花に雄花の花粉をつけ、雌花を閉じて縛ります。

そうして、屋根の上にカボチャが10個ぐらいなりました。一番大きいので5キロほどありました（当時は大きい実のなる苗を売っていたのです）。
私は屋根の棟を歩くのが得意で、結果、雨漏りを発生させてしまったのですが、カボチャは冬まで保存できる上等の代用食でした。
カボチャの茎も煮物にしましたが、茎自体にはまったく味も香りもなく、水っぽいものでした。
まともな調味料もなく、サツマ芋の茎とは違っておいしくはなかったけれど、おなかの足しにはなりました。

調味料といえば、戦争が激しくなるころから、味噌も醤油も塩もわずかしか配給されなくなりました。戦地へ送るためだそうです。
代用醤油という妙なものが配給されましたが、醤油に似ていたのは色だけで、味はまったく別物でした。
そんな代用醤油でさえも、配給が遅れると、家には味噌も醤油も塩もなくなってしまって、生命の危機を感じました。
海水を汲みに行くこともできないし、代わりになるものはありません。塩分の配給を、何よりも心待ちにしていました。
衣料切符というものがあって、服も布類も、それがないと買えなかったのですが、その衣料切符を酒屋さんにあげて、醤油をこっそり分けてもらったこともあります。
その酒屋のご主人は、焼夷弾の直撃で亡くなりました。

田んぼが青々するころになると、イナゴ（バッタの仲間の昆虫）を捕りに、友達と横浜の綱島あたりへ出かけました。いまは高級住宅地になっていますが、当時は一面の田んぼでした。
布の袋にイナゴを入れたまま一晩おくとフンをします。それから炒り煮にして、おいしく食べました。

◆戦争をすれば、子どもも空腹に泣く

おなかの足しになるものは何でも食べて命をつないだけれど、それでも十分ではなかったので、私の背丈は伸びませんでした。
17歳のころで、体重は40キロもなかったのです。

焼夷弾も爆弾も恐ろしかったけれど、おなかがすいていることのほうが恐ろしかった気がします。
空腹が続けば、確実に飢えて死ぬのですから。

戦争は、子どもの私にとって、とにかく「おなかがすく恐怖」との戦いでした。
いま、戦場になっている地域の方々も、さぞひもじい思いをされていることでしょう。

戦争をすれば、日常生活は壊され、空腹に泣くのです。

戦争だけは、止めなくてはなりません。
私も、お銭さんと声を合わせて、「戦争だけは、絶対やっちゃダメ！」と叫び続けます。

あとがき

中谷　久子

久米銈さんは、2013年5月に6日間をかけて私にこの遺言を語ってくれました。
お耳がひどく不自由なので、大声で語られます。96歳で、たくさんの重い病を抱えている方とは思えない、強い口調の江戸弁でした。
言っておかなければならないという使命感に突き動かされた激しい口調だったのです。

戦争で夫を失い、家を焼かれ、着の身着のままで子ども2人を守り通す戦いの人生を送ったお銈さんの言葉には、「すべて国の指導者たちのせいなのだから、孫や曾孫たちに同じ思いをさせてはならない。国の言うことをうのみにしていてはダメなんだ、と言い残しておかなければならない」という一途な思いが込められていました。

私自身、戦争のせいで、父の遺産をすべて失い、中学にも行けず、道端で物売りをした少女時代があるので、お銈さんの思いはひしひしと感じられました。

「96歳の遺言」を同じ年の7月に私のブログに掲載したところ、驚くほどの反響がありました。イラストレーターのきむらさやかさんから、ボランティアで電子絵本化したいとお話があり、たちまちボランティアのプロジェクトチームも誕生しました。
8月5日、きむらさんに会ったお銈さんは、もうひどく弱られていたはずなのに、俄然、生き生きされて、大声で語り続けられました。げんこつを振り回さんばかりの激しい口調でした。

その後、入院されてからは、たびたびお見舞いして、
「電子絵本ができるまで頑張って」と言いましたが、
「そんなに頑張れないよ」と淡々と言われました。
同じ病院にリハビリに通うたび、お顔を見に行きましたが、やがて会話ができなくなり、亡くなる日には肩で浅い息をしておられました。

お銈さんは、2013年9月19日、中秋の名月が煌々と沖天にかかるころ、静かに愛する春吉さんのもとへ旅立たれました。春吉さんの月命日でした。
亡くなられた後にお訪ねしたら、生前とまったく変わらない静かなお顔でした。

享年96歳の見事な大往生です。
いまは天国から春吉さんと一緒に私たちのことを見守ってくださっていると思います。
心よりご冥福をお祈りいたします。

2014年8月

兄さん、弟と
勝ち気なおけいさん、

◆関連webサイト紹介◆

□連続ツイート　◆自分の意思で平和を守りつづける為に◆
　この電子絵本化プロジェクトの発端から配信までの経緯をツイートしました。
　http://togetter.com/li/708009

□「９６歳の遺言～戦争だけはやっちゃダメ～」 http://96sainoyuigon.jimdo.com/

□ホームページにて、感想コメントを募集しています！
　お寄せ頂いた感想コメントを文集にした
「『９６歳の遺言』を読んで感じたこと、考えたこと」（仮題）
　の無料配信も予定しております。

□ 絵本化の取材のため訪れた昭和の戦中戦後の暮しを伝える資料展示を行なっている施設

◎昭和館　　http://www.showakan.go.jp/
◎江戸東京博物館　http://www.edo-tokyo-museum.or.jp/
◎しょうけい館　　http://www.shokeikan.go.jp/

※実物大の模型や、当時の実物展示など、リアリティのある展示と、関連図書、動画などが
　ご覧になれます。

「９６歳の遺言～戦争だけはやっちゃダメ～」

http://p.booklog.jp/book/88721
語り手：久米 銈　　聞き書き：中谷久子
中谷久子ブログ「八十代万歳」

企画制作：「９６歳の遺言」電子絵本化プロジェクトチーム
きむらさやか・高階經啓・長尾みさこ・中谷泰敏・大久保博志

～「９６歳の遺言」電子絵本化プロジェクトチームについて～
2011年3月の東日本大震災の復興支援プロジェクト
「ふんばろう東日本支援プロジェクト」に参加したメンバーが
中心となり結成されたチームです。
メンバーの一人の母である中谷久子さんの聞き書きを、
メンバー各々の職業的な得意分野を生かして役割分担し、
挿絵、注釈、ルビを加えて電子絵本化しました。
この作品が一人でも多くのみなさまに読んで頂けることを、
メンバー 一同心より願っています。

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/88721

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ